

アダムの肋骨とマーヴェルの庭（後編）※

吉 中 孝 志

【キーワード】 17世紀英文学・アンドリュー・マーヴェル・「庭」・英国17世紀政治思想・女性観

女嫌いの一つの現れ方である、結婚に対する否定的な見解は、少なくともギリシア時代、火の傍で本を読んでいたソクラテスに怠け者、と怒鳴って水（チョーサー版では、小水）をひっかけた有名な悪妻クサンティッペの話やテオフラストス(Theophrastus)の「結婚論」にまで遡れる。彼によれば、妻は男を哲学の探究から逸らさせてしまうだけでなく、彼のお金を浪費し、寝室説法で彼の睡眠を妨げる。他の家畜と違って手に入れる前に満足がいくものかどうか充分確かめられもしない。時代を少し下っても、例えばソールズベリーのジョンは「婚姻の不快感と重荷」で、結婚は喜びよりも心労を多く実らせる、と言って、ソクラテスやテオフラストスを引用しながら結婚は独身の孤独よりももっとうんざりすると明言していた。⁵⁷ スェトナムのように「結婚した男は捕えられた人のようである。もしも結婚という捕縛が男たちを引き戻さなければ、多くの男たちが天国へ飛翔しただろうと私は思う」と中世的なことをいう女嫌いも依然としていたし、⁵⁸ Robert Herrickのように自分の墓碑銘にまで独身であったことを誇る、所謂‘bachelormania’が17世紀の半ばに存在した。⁵⁹ ただ、ルネサンス期になると、女性の性に強い罪の意識を覚え、独身を奨励した中世よりも、おそらくプロテスタントイズムの影響で、概して結婚そのものに対しては、悪感情が薄れたと言っていいだろう。ヘンダーソンとマックメイナスは、ルネサンス期の反結婚のパンフレットが強調点を、処女性や独身主義の宗教的称揚から、女性が、主に中産階級の男性を苦しめる要因、がみがみ言うこと、不貞を働くこと、放蕩などに移したことを指摘している。⁶⁰

確かにプロテスタントイズム、特にピューリタニズムは、結婚の意義を強調したが、一方で夫への絶対的な服従を強いたから、結果としてはルネサンス期においては、女嫌いの原因が、女性自身や女性性の持つ欠点に由来する場合よりもむしろ夫婦間の権力闘争において女性が男性よりも優位を得ようとする時の恐怖、脅威に由来することが多いように思われる。例えば、反フェミニスト作品としては最も機知に富んだ作品の一つである1603年の『独身者の御馳走』(The Bachelors' Banquet)の主な強調点は夫を支配しようとする女性の能力を風刺することに置かれていたし、逆に、1562年以降教会で必ず読まれるように国王が定めた『結婚に関する説教』等で繰り返され強調されたのは、17世紀初頭の聖職者ウィリアム・ウェイトリーの言葉を借りれば「良

き妻でありたければ、幸せに暮らしたければ、夫が自分よりも優れて良き者であること、権威を持ち、自分を支配する者であることをわきまなさい。」という訓戒であった。彼は妻たるものに言う、「もしも神が汝の家を汝の牢獄としたまい、汝の夫を監獄の番人にしたもうとも、脱獄しようとしてはいけない。その牢獄に汝を入れた彼が、汝を釈放してくれるまで。」⁶¹

ミルトンの『失樂園』の中でも墮落の原因は、アダムとエバの支配・被支配関係が崩れたことにあるとされている。興味深いことに、エバの弱さやアダムに対する従順の必要性は提示されはしても、墮落の根本的な原因は、エバの罪ではなく、アダムがエバに対する権威を充分行使しなかったことに帰されている。エバが自分を誤たせたのだというアダムにキリストは答える。

Was she thy God, that her thou didst obey
 Before his voice, or was she made thy guide,
 Superior, or but equal, that to her
 Thou didst resign thy manhood, and the place
 Wherein God set thee above her made of thee,
 And for thee, whose perfection far excelled
 Hers in all real dignity: adorned
 She was indeed, and lovely to attract
 Thy love, not thy subjection, and her gifts
 Were such as under government well seemed,
 Unseemly to bear rule, which was thy part
 And person, hadst thou known thy self aright.

(Book X, ll. 145-156)

ここで表されている、アダムのエバに対する支配能力欠如が人類の破滅を招いたとする考え方は、例えばÆmilia Lanyerのような女性擁護論者が、いわば、部下のミスは上司アダムの責任であって、罪は男の方が重いとする考え方に発展させられる可能性を秘めている。⁶² ともあれ、ミルトンは、夫婦間の主従関係の致命的な逆転を非難していると見てよいだろう。⁶³ ここで想起せねばならぬことは、殊に17世紀中葉においては、尻に敷かれた亭主は、政治的な意味でも嘲りの的であったということである。それは、Sir Robert Filmerの論に代表されるように、当時の政治理論が、父の権威の下に妻と子供が服従するという家庭内での家父長制を理想の基としていたからであるが、特に重要なのは、国家の政治的判断を、サムソンのように、またミルトンによって描かれたアダムのように、一介の女にすぎない、しかも外国人、カトリック教徒、我が英国という庭に住まう背教したエバである、妃ヘンリエッタ・マリアに引き渡してしまった国王チャ



図2 Charles (the sun) threw his country into utter destruction being overpowered by his Catholic wife (the moon) (1644)



図3 the King is ruled by his Catholic wife and her popish advisor (1644)

ールズのことを多くの、少なくとも議会派の、人々は知っていたからである。再三再四、当時の政治パンフレットはこのことを扱った。例えば、『大いなる日蝕』(The Great Eclipse of the Sun, 1644)の木版画は、太陽である国王チャールズが、妃を表す月によって陰らされ、それが原因で暗黒と殺戮が生じていることを描いているし(図2参照)、『サセックスの絵』(The Sussex Picture, 1644)では、ヘンリエッタ・マリアの影響でチャールズが支配権をカンタベリー大主教 William Laudへ譲り渡していることを示唆している(図3参照)。

Thou hast beheld therein the weaker Sexe triumphing over the stronger, and by the help of a

Miter, thou hast seen a scepter doing homage to the Distaffe.... We here in this Table beheld a Prince much resembling in visage our King tendring his Scepter to his Lady, whilst she with her hand seems to waft the same towards a pompous clinquant Bishiop.⁶⁴

1649年のチャールズ処刑後ミルトンは、1629年から1640年の間、議会なしで、「我が宝石」とフランス人の妃を呼んで事実上女家長制を敷いていた国王の女々しい恐妻家ぶりを嘲って次のように書いている。

How fitt to govern men, undervaluing and aspersion the great Council of his Kingdom, in comparison of one Woman. Examples are not farr to seek, how great mischief and dishonour hath befall'n to Nations under the Government of effeminate and Uxorious Magistrates. Who being themselves govern'd and overswaid at home under a Feminine usurpation, cannot but be farr short of spirit and authority without dores, to govern a whole Nation. ... most men suspect she had quite perverted him.

チャールズの妻に対する依存ゆえに、彼は常に破滅的な忠告に、陰謀に、絶対君主としての野心に身を委ねることになった。ネイズビーの戦いで押収された国王と妃の秘密書簡を基に、ミルトンは「要するに、彼は女に統治されていたことを示している。」（‘to sumn up all, they shewd him govern'd by a Woman.’）と言う。⁶⁵

勿論、政治的レベルでの「尻に敷かれた夫」が嘲りの対象となりうるのは、日常レベルで、我々が、また17世紀の人々が結婚生活そのものの中に家父長制権力関係が転倒する要素を孕んでいることを自覚しているからである。例えば、既にテオフラストスは「もしも家の管理を全て妻に任せてしまえば、君は彼女の奴隷にならざるをえない」と言って、家庭生活を送る事自体に、妻に実権を握らせてしまう可能性があることを示唆していたし、「君がもしも心から妻に優しくしようとするのなら、そして一人の女に献身するのなら、頭を垂れて、くびきを背負えるように首を出す方がよい。」と言ったローマの詩人ユヴェナリス(Juvenal)の考えでは、結婚愛は妻に甘すぎることと同義であった。⁶⁶ ローレンス・ストーンは、妻が支配権を握った幾つかの方法について「特定の仕事の責任における独占権、性的な好意を与えるか拒むかの立場、子供に対する支配権、がみがみ言う能力、こういったこと全てが妻たちに家庭内での役に立つ、潜在的な操縦桿を与えた」と指摘している。⁶⁷ スェトナムは、彼の『淫らで怠惰、生意気で不貞な女たちに対する糾弾』の中で、もし妻が買ってほしいと言うものを手にいれなければ、それを手に入れるまで彼女は黙ることはないし、欲しいものを手に入れさせ、言いたい事を言わせ、行きたいところに行かせなければ、「家の中は憤懣の煙で一杯になり中には居られない」（‘otherwise thy house

will be so full of smoke that thou canst not stay in it')と言っているし、1639年に出版されたパンフレットでジョン・テイラーは、「もしあんたが今流行の帽子を私に買ってくれないなら、時代後れの帽子をあんたに被らせてあげるわよ」と言って、不貞を働いて夫に角を生えさせると脅すことで夫を操ろうとする妻を描いている。⁶⁸ こういった、女性の男性操縦方法は、たとえ書かれている場所が女性を攻撃する目的のパンフレットであろうともまんざら嘘ではないと思われる。

さて我々はそろそろマーヴェルの「庭」に戻る必要がある。今まで我々は、「庭」の囲いの外の、17世紀中葉の女性の騒がしさとその意味を考えて来た。しかし、思い出さなければならないのは、女性という蛇は、楽園の外ににいるのではなく、囲いの中に潜んでいるということである。「庭」とフェアファックス家を関連づけて読むならば、我々は、マーヴェルの女嫌いにもうひとつの理由を見出すことができるように思われる。

既に見てきたように17世紀中葉にあつては、女性が公衆の面前で声をあげることは、強い非難を招くこと必至であつた。フェアファックス婦人に纏わる国王処刑裁判でのよく知られた逸話は、少なくとも敵方には、彼女にがみがみ女のレッテルを張るのに充分ではなかつただろうか。即ち、裁判所長官ジョン・ブラッドショーが開会の弁舌を始め、「イギリス国民の名のもとに」この裁判が行われる、と述べると、法廷の高さじきにいたアンは、はっきりとその言葉に反対して「イギリス国民の半分も、いや、四分の一も賛成しちやいない。オリヴァ・クロムウェルは裏切り者だ。」と叫んだというのだ。⁶⁹ 後にミルトンがマーヴェルの就職の為に書いた1652/3年2月21日付けの推薦状は、事もあろうにブラッドショーが読む立場にあり、マーヴェルがフェアファックス家と関わっていたことが、最初の就職活動の失敗につながった可能性がある。間接的にはあれ、マーヴェルは、フェアファックス婦人の、女性としてはあるまじき言動に迷惑する立場に置かれるわけである。⁷⁰

そもそもフェアファックス卿が引退しナン・アップルトンに引きこもる決心をした大きな理由は、この国王の処刑問題とスコットランド問題であつた。基本的に立憲君主制を擁護していたフェアファックス将軍にはチャールズ1世を断頭台にかけることなどもってのほかであつたし、スコットランド制圧を目指すクロムウェル派議会軍に対して、長老派の信仰を持つフェアファックス家が根本的に意見を異にしたのは当然であつた。しかし、この物議をかもした動乱のさなかでの引退というフェアファックス卿の判断に強い影響を与えたのは、断固とした長老派でクロムウェルと独立派を嫌悪していた、彼の妻、アン・フェアファックスであつた、という説がある。長老派の極めて厳格な一夫一婦婚の道德原理が妻の夫に対する影響力を強める方向に作用していたということも大いに考えられる。⁷¹ そういえば、マーヴェルは、フェアファックス卿のヨークシャーの領地である「ビルバラの丘と森によせて」('Upon the Hill and Grove at Bill-borow')こんなふうには書いていた。

Vera the *Nymph* that him inspir'd,
 To whom he often here retir'd,
 And on these Okes ingrav'd her Name;
 Such Wounds alone these Woods became:
 But ere he well the Barks could part
 'Twas writ already in their Heart.

(11. 43-48)

妻アンの実家であるヴィア(Vere)に殊更威厳を持たせる為のラテン語風の名をつけた妖精ウェラが、しばしば戻って来るフェアファックス卿に靈感を与えた、という表現は、意地悪く読めば、尻に敷かれた夫が怖い奥さんのご意見を伺いに戻って来ることの詩的表現ではないか。さらに重要なのは、マーヴェルは、「庭」の中では、木の幹に恋人の名を刻むという行為をむしろ非難している（'Fond Lovers, cruel as their Flame, / Cut in these Trees their Mistress name', ll. 19-20）ということである。つまり、フェアファックス卿も少しだけではあるが、彼の妻への'Fond'ぶりを笑われている、少なくともからかわれている、可能性はないだろうか。更に皮肉なのは、ビルバラの櫛の木々にはフェアファックス卿が妻の名前を刻む前から既に、否、正確には妻の実家の姓が、心の中に刻まれているというのだ。この所領は妻方のもの、という主張をここに読み込めないだろうか。興味深いことに、ルグイはフェアファックス卿が恐妻家であったことを示唆している。⁷² 我々には状況証拠しか手がないが、これがたとえ当時のただの噂であっても、マーヴェルの「庭」にもう一つの意図を読み取るきっかけになるように思われる。

フェアファックス卿のために書かれた「アップルトン屋敷によせて」、殊にフェアファックス家の祖先に纏わる逸話の部分は、本来、強力な母系家族であるフェアファックス家の中の夫、トマス、の妻に対する優位性を擁護する言説として機能させることが意図されていなかっただろうか。所領の起源を扱った一つの理由は、確かに、ヒュー・ジェンキンスが指摘しているように、水平派ウインスタンリーが主張する、フェアファックス卿を含めた王侯貴族の財産所有権の基礎がノルマン人の征服以来の国王の統治に始まるという考え方にはっきりとした答えを提示することであった。つまり、国王がいなくなっても、プロテスタントの宗教改革を起源とするフェアファックス家の所領は、ウインスタンリー等が望むような共有地の状態に戻るわけではない、ということである。⁷³ そして、同時に、フェアファックス家の先祖、処女スウェイツ（'Virgin Thwates', l. 90）を彼女の持つ所領故に彼女を取り込もうとする（' 'Tis thy state, / Not Thee, that they would consecrate', ll. 221-222）、狡猾な尼僧たち（'Suttle Nunns' ,l. 94）の手から、プロテスタントのウィリアム・フェアファックスが救い出し、僧院を破壊するという話は、明らかな反カトリック的言説となっていることは言うまでもない。

しかし、今まで見過ごされているもう一つの大切な要素は、尼僧たちがプロテスタント的家父長制秩序の敵として描かれているということである。フェアファックス卿お付きの詩人によって描かれた修道院解散という歴史的事件は、ローマ・カトリックからプロテスタンティズムへという英国の宗教的移行を表象しているだけではなく、独身主義から結婚の正当性を主張する考え方への移行を表してもいるのだ。ローマ・カトリックに対して、特にピューリタン達が異議を唱えた主な理由の一つは、前者が女性に、独立した、男性の支配下でない、宗教生活を許す機会を与えていたことであった。マーヴェルの描く尼僧は、フェアファックス卿の宗教的な敵というだけではなく、むしろ家父長制の秩序を脅かす女として、男性の敵でもあったのだ。尼僧達は、男性支配を拒み、「アマゾンの女たち」(‘*Amazons*’, l. 106)のようであり、彼女らの「もっとも音高き大砲は、彼女らの肺、／もっとも鋭い武器は、彼女らの舌であった。」(‘... their lowd’st Cannon were their Lungs; / And sharpest Weapons were their Tongues’, ll. 255-256)。更に注目すべきは、17世紀中葉においてのアマゾン族のイメージは過激派のレッテルを貼られた、女性の宗教活動家達を表すために用いられていたということである。マーヴェルの意図したかもしれない皮肉は、尼僧という隠棲の領域に住まう女達にこのイメージを使ったことである。⁷⁴

そして、この女嫌いの言説を確認するように、フェアファックスの先祖たちが回復するのは、他ならぬ、男女間の、救う者と救われる者との関係、能動的男性と受動的女性の間の家父長制的力学上の均衡なのである。

Young *Fairfax* through the Wall does rise.

...

But truly bright and holy *Thwaites*

That weeping at the *Altar* waites.

But the glad Youth away her bears,

And to the *Nuns* bequeaths her Tears

(ll. 258, 263- 6)

あくまで主導権は、男が握り、女はただ、涙して待つのみ。⁷⁵ 男は女を財産として、所有物として運び去る。尼僧たちが狙っていたスウェイツの所領はフェアファックスが受け継ぐことになるのである。

家父長制維持のための言説は、一人娘メアリの描き方にも現れているように思われる。マーヴェルは、彼女を殊更、女嫌いの言説の対象となるような女性と対比する。

*She counts her Beauty to converse
 In all the Languages as hers;
 Nor yet in those her self employes
 But for the Wisdome, not the Noyse

 And Goodness doth it self intail
 On Females, if there want a Male.*

Go now fond Sex that on your Face
 Do all your useless Study place,
 Nor once at Vice your Brows dare knit
 Lest the smooth Forehead wrinkled sit

(ll. 707-710, 727-732)

メアリの身に着けている知恵と美德は、がみがみ女の言葉とは全く違うし、化粧で塗りたくられた偽りの美でもない、というマーヴェルの賛辞の詩行は、奇妙にも、フェアファックス家に男の世継ぎがない、この一人娘が家系を存続させなければならない（‘Hence She with Graces more divine / Supplies beyond her Sex the Line’, ll. 737-738）という家父長制社会のみが抱きうる不安と交錯しているように思われる。成熟しきっていないメアリは、容易に脱性化(de-sexualize)されて、家系を維持する男性の役割も担えるかのように描かれざるを得ないのである。

森の中で収拾がつかなくなった自然に取り巻かれていた詩人を、詩の最後の部分で救い出し、秩序を回復するようにメアリが登場する。詩人は、何故、この理想化された役割をフェアファックス婦人に譲らなかったのだろうか。「アップルトン屋敷によせて」が連なるカントリー・ハウス詩のモデルであるベン・ジョンソンの「ペンズハーストへ」は、作品を調停させる役目を館の女主人、シドニー婦人に与えている。⁷⁶ ただ、マーヴェルが新機軸を打ち出そうと工夫したというよりも他に、フェアファックス婦人には、メアリには可能であった、理想化を阻む要素があると感じていたのだろうか。女嫌いの言説は、メアリとならば対照的に描けても、アン・フェアファックスとは対照的に使えなかったのだろうか。

1651年に書かれた『『一般的誤謬』の翻訳によせて尊敬すべき友人ウィッティ博士へ』（‘To his worthy Friend Doctor Witty upon his Translation of the Popular Errors’）の中でマーヴェルは、メアリ・フェアファックスとおぼしきCeliaの、英語を中心とした語学の才を褒めたたえ、翻訳家達は彼女に学ぶがよい、と言った後で

but stay I slide
Down into Error with the Vulgar tide;
Women must not teach here.

(ll. 28-29)

と、すぐに訂正を加え、理想化されたメアリのすぐそばに女嫌いの言説の対象となりうる女性の影を感じさせる。もしもマーヴェルの「庭」がフェアファックス家と関わりがあるのなら、彼の女嫌いの庭は、その囲いの外側に、キャサリン・チドリーのような急進派セクトの騒がしい女性を、その囲いの内側には、自分の雇い主の伴侶を意識していたと考えられるかもしれない。ただ、後者の女嫌いに関しては、前者に比べれば程度も軽く一時的なもので、雇い主をからかう要素が強いのだろう。詩人が

What other Help could yet be meet!
But 'twas beyond a Mortal's share
To wander solitary there

(ll. 60-62)

と言うとき、彼は、フェアファックス卿に含みのあるウイックをしていたに違いない。そして、少なくとも詩の表面、明示された言葉のレベルではフェアファックス婦人を追い出しながら、マーヴェルは、女嫌いの言説がその効果として生み出すものを自分の雇い主との間に期待していたのかもしれない。その効果とは、例えば、ミルトンの『離婚論』の中で表された「夫婦関係の主な利点は、その慰めと平安である」という考え方に反論するかたちで1644年に出版された『離婚の教義と規律と題された本に対する答え』の著者がその言説によって作り出していたものと同じである。著者は、エバ創造の物語を繰り返しながら、アダムにとって、そして全ての男性にとって、「彼の肋骨からエバの代わりにもう一人の男が造られたなら」(‘to have had another man made to him of his Rib in stead of Eve’) もっとよかっただろう。なぜなら「通常、精神的な生来の才能の点で、会話の快さにおいて、男性が女性に優っていることは」(‘that man ordinarily exceeds woman in naturall gifts of minde, and in delectableness of converse’) 経験から判るからである、と言う。⁷⁷ 男性を理想化することはしばしば、他者である女性を貶めることでなされてきた。女性の存在を楽園から、詩の表面から、排除しようとする身振りは、マーヴェルの場合、二義的にホモ・エロティックであり、一義的にはホモ・ソーシャルであったように思われる。現実の社会で男性優位の概念の真実性が揺れ動き始める16世紀末以来、そして特に17世紀中葉の逆さまの世界において「じゃじゃ馬」や「がみがみ女」は単なるお笑いの対象ではなく、社会秩

序をおびやかす脅威の存在として描かれることになる。この段階では、女嫌いは女性についての表現というよりも社会についての表現である。経済的社会的な変化に対する不安や恐怖を表すことになるのである。マーヴェルは「庭」の囲いの中に引きこもることで、社会的な女嫌いを、もとの人間的な、個人的な女嫌いのレベルに引き戻そうとしているかのようである。少なくとも、狙われた効果の一つは、フェアファックス婦人の「がみがみ女」ぶりを雇い主と冗談ぼく分かち合う（‘share’, l. 61）ことで、男同志の絆を、そして雇用関係をひそやかに確認し、確保することだったとは言えるかもしれない。ただ、それが必ずしも成功していないのが、つまり「庭」の外部を排除しきれていないことが、この詩の成功の所以であるとも言えるのだが。

注

57. Katharine M. Rogers, *The Troublesome Helpmate*, pp. 56, 24, 73.を見よ。
58. Joseph Swetnam, *The Arraignment*, rpt. in Katherine Usher Henderson and Barbara F. McManus, *Half Humankind*, pp. 195-196.
59. Robert Herrick, ‘To his Tomb-maker’, *The Poetical Works of Robert Herrick*, ed. L. C. Martin (Oxford: Clarendon Press, 1956), p. 199. See also Jonathan F. S. Post, *English Lyric Poetry: The Early Seventeenth Century* (London: Routledge, 1999), pp. 118-119.
60. Katherine Usher Henderson and Barbara F. McManus, *Half Humankind*, pp. 24-25.
61. William Whateley, *A Bride-Bush, or, A Direction for Married Persons* (London, 1623), p. 213. さらに、同上、pp. 15, 78. Katharine M. Rogers, *The Troublesome Helpmate*, pp. 144-145を見よ。
62. Æmilia Lanyer, [from *Salve Deus Rex Judaeorum*], rpt. in *The Penguin Book of Renaissance Verse 1509-1659*, ed. David Norbrook and H. R. Woudhuysen (Harmondsworth: Penguin, 1992), p. 556.
63. 従順さを強要せず、エバの自由意思を尊重させたアダムは、がみがみ女エバに屈した恐妻家ではない、という議論は、Harold Skulsky, *Milton and the Death of Man: Humanism on Trial in Paradise Lost* (Newark: Univ. of Delaware Press, 2000), p. 72 を見よ。
64. *The Great Eclipse of the Sun, Charles his Wane Over-clouded by the Evil Influences of the Moon* (London: G. B., 1644), Wing (2nd ed.) G 1688, Thomason E. 7 [30]; *The Sussex Picture, or An Answer to the SEA-GULL* (London: F. N., 1644), Wing (2nd ed.) S 6205, Thomason E. 3 [21], sigs. A 2^r, A 3^r. 木版画は、Dagmar Freist, *Governed by Opinion: Politics, Religion and the Dynamics of Communication in Stuart London 1637-1645* (London: I. B. Tauris Publishers, 1997) に複写されている。
65. John Milton, *Eikonoklastes, Complete Prose Works*, ed. Don M. Wolfe, 8 vols. (New Haven: Yale U. P., 1953-82), iii, 421-422, 538. ヘンリエッタ・マリアとその召使らのために開かれたプロテスタントの礼拝行事のさなか、彼女らは、会衆の前を「ペチャクチャと喋りながら、大きな音をたてて」通り過ぎ、二度にわたって、説教を中断させたことにもミルトンは言及している。

- 同書、422頁、注14を見よ。See also C. V. Wedgwood, *The King's Peace: The Great Rebellion, 1637-1641* (London: Collins, 1955), pp. 69-70, 238; S. R. Gardiner, *The Fall of the Monarchy of Charles I* (London, 1882), p. 391.
66. Katharine M. Rogers, *The Troublesome Helpmate*, pp. 25, 39.
67. Lawrence Stone, *The Family, Sex, and Marriage in England 1500-1800* (New York: Harper & Row, 1977), p. 199.
68. Joseph Swetnam, *The Arraignment*; John Taylor, *A Juniper Lecture, With the description of all sorts of women, good and bad* (London, 1639), rpt. in Katherine Usher Henderson and Barbara F. McManus, *Half Humankind*, pp. 199, 295.
69. C. V. Wedgwood, *The Trial of Charles I* (London: Collins, 1964), p.175.
70. Pierre Legouis, *Andrew Marvell, Poet, Puritan, Patriot* (Oxford: Clarendon, 1965), pp. 93-94.
71. See Christopher Hill, *Some Intellectual Consequences of the English Revolution* (London: Phoenix, 1997), p. 75: 'In sociological terms the Presbyterian discipline had offered a means of imposing new mores, of enforcing the protestant ethic, a stricter monogamous morality, labour discipline, sabbath observance against the traditional rural festivals.'
72. Pierre Legouis, *Andrew Marvell, Poet, Puritan, Patriot*, p. 19: 'when he [Fairfax] resigned his command the Republicans ascribed this decision to her influence and suggested that the General was henpecked'.
73. Hugh Jenkins, 'Two Letters to Lord Fairfax: Winstanley and Marvell' in *The English Civil Wars in the Literary Imagination*, ed. Claude J. Summers and Ted-Larry Pebworth (Columbia: Univ. of Missouri Press, 1999), pp. 148-149.
74. アマゾン族として描かれた女性活動家については、ダラム大学17世紀研究センター主催の第9回国際大会 (Durham Castle, 16-19 July 2001)において発表されたJane Baston, 'Foreign Bodies: figuring the Amazon in the seventeenth century'による。更に、彼女はHenrietta Mariaもアマゾン族の女として言及されていることを指摘したが、同セッションでのLaura Knoppersの発言によれば、Henrietta Mariaは、'she-Tamburlaine'としても言及されている箇所があるということである。1640年の2月に三度上演された宮廷仮面劇*Salmacida Spolia*の中では、アマゾン族の衣装を纏った女兵士たちを付き従えた主役のヒロインとして登場している (Alison Plowden, *Henrietta Maria: Charles I's Indomitable Queen* [Phoenix Mill Thrupp, Gloucestershire: Sutton Publishing, 2001], p. 138)。夫婦間の勢力関係においてヘンリエッタ・マリアが優勢を占めれば、その当然の帰結として、たとえば王党派に対する議会派の諷刺作品である*The Character of an Oxford-incendiary* (London, 1645)の中でなされているように、彼女はおとこおんな ('Henrieta Maria! Sure our Incendiary is an Hermaphrodite, and admits of both Sexes', E279 6)と

して描かれることになる。一方、エリザベス朝にあってはアマゾン族のイメージは確かにより肯定的で、エリザベス自身が1588年にティルブリで軍を前に演説をした際、彼女はアマゾン族の女兵士の衣装を纏ったとされている。(See Winfried Schleiner, 'Divina Virago : Queen Elizabeth as an Amazon', *Studies in Philology* 75, 2 [1978], pp. 163-80.) James Aske は *Elizabethan Triumphans* の中で、戦闘的勇士としての君主エリザベスを 'In nought unlike the Amazonian Queene' (John Nichols's reprint in *The Progresses and Public Processions of Queen Elizabeth*, 3 vols. [London: John Nichols and Son, 1823], ii, 570) と描いている。しかしながら、エリザベス朝においてさえ、アマゾン族のイメージは否定的ニュアンスを免れず、何らかの危険性を暗示したり、家父長制に包摂されるべきものとしての側面を持っていたことは指摘されねばならない。前者に関しては、スペンサーの描く女戦士を例に Ruth Gilbert, *Early Modern Hermaphrodites: Sex and Other Stories* (New York: Palgrave, 2002), p. 55 が説明しているし、後者に関しては、たとえば Paul Stebbings 演出の The International Theatre Company London 18th Japan Production (広島女学院大学ヒノハラホール、2002年5月30日) で強調されたように、シェイクスピアの『夏の夜の夢』の冒頭でヒポリタがアマゾンの女王であること、さらに重要なこととして、彼女がアテネの大公シイシュウスに屈伏して結婚という家父長制を維持する枠組みの中に取り込まれたことをエリザベス朝の観客はことさら意識した（もしくは、ことさら当然のこととして意識すらしなかった）であろうというのを思い出す必要がある。

75. 勇敢な男が、女性を救う物語は、エジプト王トレミーの伝説の娘、Princess Sabra を竜から救出し、彼女と結婚する Saint George の神話にも遡ることができる。この主題が、家父長制度下のヴィクトリア朝において Edward Burne-Jones などの画家によってしばしば繰り返し描かれていることは興味深い。Adrienne Auslander Munich, *Andromeda's Chains: Gender and Interpretation in Victorian Literature and Art* (New York: Columbia U. P., 1989), pp. 120, 121 に複写されている例を見よ。
76. 「ペンズハーストへ」の中のシドニー婦人の役割については、Don Wayne, *Penshurst: The Semiotics of Place and the Poetics of History* (Madison: Univ. of Wisconsin Press, 1984), pp. 68-72 を見よ。
77. Anonymous, *An Answer to a Book, Intituled, The Doctrine and Discipline of Divorce* (London, 1644), pp. 11-12. 既にジョン・ダン は次のように言っていた。'Quanto congruentius, says S. Augustine; how much more conveniently might two friends live together, then a man and a woman?' (*The Sermons*, ed. George R. Potter and Evelyn M. Simpson, ii, 339).

※この論文は、2000年6月17日に十七世紀英文学会関西支部第139回例会において「マーヴェルの女嫌いの庭 再考」として口頭発表したものに加筆、修正を加えたものであり、平成13年度科学研究費補助（基盤研究Bの2）による研究成果の一部でもある。

The Rib of Adam and Marvell's 'The Garden' (Part III)

Takashi YOSHINAKA

Further to the second part of this study in the previous volume, in order to suggest the other cause of Marvell's misogynistic gesture, the paper attempts to prove that there was — even if its truth cannot be demonstrated — at least a rumour that Lady Fairfax was (according to the standard of the time) a scold, who dared to shout in public, and that Lord Fairfax was henpecked. Certain of Marvell's lines — such as '*Vera the Nymph that him inspir'd, / To whom he often here retir'd*', in 'Upon the Hill and Grove at Bill-borow: To The Lord Fairfax' — can be read as alluding to Lady Ann Fairfax's powerful influence over her husband. Given this factor, as the other possible cause for the poet's misogynistic expression in 'The Garden', the paper argues that Marvell might have intended to facilitate the male friendship and relationship with his employer by hinting at the possible common enemy, the matriarchic truculent 'Mate' inside 'The Garden'.

The paper concludes that Marvell seems to attempt to put the large-scale breakdown of the patriarchal order and the threatening topsy-turvy public world to a more mild, domesticated, private homo-social use. At the same time, however, this attempt does not necessarily seem to have succeeded, because the private, henpecked relationship that can be lightly ridiculed inevitably invokes the public and politically serious one between Charles I and Henrietta Maria — the Adam and Eve who led the Garden State of England to the Fall.